

01

背景

2011年3月11日14時46分。三陸沖、深さ約24kmを震源とするM9.0の日本国内観測史上最大規模の地震が発生。この地震による地格変動に伴い、巨大な津波が発生。津波は、岩手・宮城・福島を中心とした各地を襲い、日本に未曾有の被害を及ぼした。これらの地震による災害は **東日本大震災** と総称され、あの日の教訓は今も、震災当事者によって語り継がれている。

私は岩手県の内陸地域出身であり、直接被災をした「震災当事者」では無い。しかし、震災から約1ヶ月後に親戚がいた被災地へ足を運んだ際、今まで見たことも想像したこともない、被災地の壊滅的な状況に衝撃を受けた。本研究制作は、私が小学校5年生のときに「東日本大震災」をテーマにし、その時の衝撃的な経験を書いた、一つの**作文**が起点である。

震災から11年が経過したいま、見えてくる震災における課題と問題点

「被災地」「被災者」という表現への違和感

ニュースや新聞で、震災で甚大な被害があった地域のことに取り上げられる際、「被災地」「被災者」という単語が頻繁に使用されている。実際に被災地と呼ばれる地域へ行ってみると、まちの中心部には商業施設や公園が建設され、その土地に住む人々は新しい暮らしを営んでいる。被災地・被災者が新しい暮らしを築き始めているのにもかかわらず、津波被害のイメージが強い影響によって、この先も「被災地」「被災者」というマイナス的な暗いイメージを持たれ続けるかもしれないという現状に、とても強い違和感を持った。

あの日の教訓や記憶が風化されはじめているという問題

東日本大震災から11年以上が経ち、全国的に見ると徐々に記憶や教訓の風化が進んでいることが問題としてあげられる。これ以上風化が進むと、またいつか東日本大震災のような災害や、それ以上に大きい災害が起きた時に、同じような悲劇を繰り返してしまう可能性がある。東日本大震災の教訓を後世に伝え、風化をさせないということは、自分たちの子孫を守ることに繋がっていくと考える。

岩手県 陸前高田市

作品制作の舞台

なぜ？

陸前高田は、私にとって家族の思い出の地だ。震災前は毎年、家族で潮干狩りや海水浴に行ったりしていた、思い出のあるまちである。01- 背景で紹介した、作文の文中にも陸前高田が出てくる。また、震災後も何度も陸前高田の海へ遊びに行き、震災後から本研究を行った2022年までの11年間、復興が進むまちの変化の様子を陰ながら見てきた。陸前高田のまちが、年々変化していく様子を見ていたからこそ、自分らしい作品が作れるのではないだろうか考え、「陸前高田市」を対象地とした。

陸前高田市の概要

位置：岩手県南東端の太平洋に面する市

人口：約1万8000人（令和4年10月31日現在）

産業：農業・林業・漁業を中心とした第一次産業が中心

特産品：牡蠣・わかめ・ホタテ・お米（たかたのゆめ）・

米崎りんご…など

〈東日本大震災の被害状況〉

震度6弱。最大17mの津波が陸前高田市を襲い、市の中心部は壊滅状態となった。津波による犠牲者は、2013年時点で死者1,597人・行方不明者216人に上っている。

8000の世帯があったが、津波によって半数以上の世帯が被害を受け、被害を受けた世帯のほとんどが全壊した。



03

本研究制作は【半当事者】という独自の表現に着目！

目的

半当事者とは？

震災当時、日本人全員が被害を受けた地や人に対し、何か支援の行動ができただろうか？私自身は、震災当時小学4年生で、同じ岩手県内の支援に携わる行動を起こしたくても、行動に移せない…という、もどかしさを抱えていた。その時の悔しい想いが、大学4年生になった今も心の隅に残されており、何か出来ることは無いかと様子を伺っていた「半当事者」の一人である。

◎半当事者とは、東日本大震災について見聞きしたことがあったり、被災地や被災者に対して心を寄せた経験が少しでもある、全ての人々のことを表している。

明らかに被災をしたと思われる人さえも、想像上の自分より強く被災した他者への配慮から、被災者と語れない現状がある。それにもかかわらず大多数の人々が、自分自身と当事者を切り分けてしまう感覚を持ってしまうと、震災の記憶や教訓が忘れさられ、また東日本大震災のような同じ悲劇を繰り返してしまうのでは無いただろうか？だからこそ、当事者では無いと考えている多数派の人々を「半当事者」と表現することは、想像上の自分より強く被災した他者への過剰な気遣いから解放され、被災地や被災者と関わりやすくなったり、震災と向き合いやすくなるのではないだろうか？

陸前高田のことを知らなかった人が本作品を見たことで、インターネットで陸前高田市のことを調べたり、行ってみたいと思ってもらったりする。この、陸前高田や震災について知ってもらう・思い出してもらう・分かってもらおうとする過程や行為自体が、半当事者が当事者になるためのきっかけである。そして、そのような行為は、震災を風化させずに、教訓を伝承していく媒体となる。本作品は、半当事者と陸前高田の接点を作ってあげるような、被災地と関わる勇気を与えてくれるような、そんな作品を目指している。

04

方法

陸前高田に滞在し、その土地で暮らす人々と 関係を一からつくる。

私自身が「半当事者」という立場で、被災地である陸前高田に滞在し、その土地で暮らしを営む人々と繋がりを作る。私が、「陸前高田の人」として、陸前高田での暮らしを体験していく中で「震災・陸前高田・そこで暮らす人々」との関係や向き合い方が、どのように変化していくのかを記録する。

この現地での滞在を通し、改めて「東日本大震災」と向き合う。それらの記録を作品とすることで、私と同じように、心のどこかに震災のことが引っかかっている人たちに対して、震災と向き合えるような「一步を踏み出す勇気」を与えたい。

どのように繋がりを作る？

陸前高田で繋がりを作るために、NPO 法人 SET が事業で行っている「高田民泊」を利用し、陸前高田の一般家庭で暮らしの体験を行う。その民泊で、出会った方々を通して、また他の方との繋がりを作っていくことを目指し、民泊を起点にして、関係を広げていった。

記録手段

これらの記録手段は、右記の4つである。特に、①と②は、主要な記録メディアとして、使用する。

③と④はサブの記録方法として、必要があれば適宜、記録に使用する。

- ①フィルム写真（フィルム一眼レフカメラ）
- ②映像＋音声（ミラーレス一眼カメラ・マイク）
- ③デジタル写真（ミラーレス一眼カメラ）
- ④文字

05 作品概要

作品名

Enter the manuscript paper

[原稿用紙の中に入り込む]
という意味。
作品を見た人が
物語に入り込んで鑑賞して
もらえるように

はじめに -

東日本大震災からもうすぐ12年目を迎えようとしている今、
震災の記憶や教訓の風化が顕著に進んでいる。

本研究制作は、私自身が半当事者という立場で、
陸前高田市に出向き、その土地で暮らす人々と、
1から繋がりを広げていく、その【過程】を大事にしている。

私は陸前高田での滞在を通し、そこで暮らしを営む人々が、
震災という悲しい現実から目を背けず、
悲しさを持ちながらも、強く前向きに生きる姿を間近で見た。

大きく目立つ作品「Enter the manuscript」は、
その経験を通して、どのように私の半当事者性が変化していったのかを
可視化したものである。

コンセプトと想い

本作品は、私が小学5年の時に書いた作文を土台にして制作を行った。

この作文からは、小学5年生の陸前高田での家族の思い出を津波によって奪われたために、「陸前高田＝悲しいイメージ」を持っていると読み取れる。しかし、今回の研究制作で、実際に陸前高田に出向いてフィールドワークを行い、陸前高田の人々と関わりを持ち、そこで密度の濃い時間を一緒に過ごしたことで、徐々に私の陸前高田に対するイメージが、【前向きなイメージ】へと変わっていった。このことから、「悲しいイメージ」が時間をかけて「前向きなイメージ」へと塗り替えられていく様子を、作品を使って表現することにした。

コンセプトは、**原稿用紙**

本研究制作は、小学5年の時に原稿用紙に書いた『作文』を起点にして始まった研究である。このことから、本作品は、壁面の11年前に書いた作文と、11年後の本研究制作における陸前高田での滞在記録が重なりあい、作品を正面から見た時、一つの物語に見える。

鑑賞者を本作品自体に没入させることによって、陸前高田と鑑賞者をくっつけるような役割を果たすことができたら良い。また、私は、「震災を思い出す」という行為自体が、震災の記憶を風化させないための一つの行動であると考えている。本作品を鑑賞した人は、作品を通して「震災を思い出す」という行為自体を引き出し、震災と再度向き合うためのきっかけを作る媒体になるだろう。

そして、本作品を通して、震災のことが心のどこかに引っ掛かっている人や、震災についてあまり知らない人に対して、一歩を踏み出して震災や被災地、被災者と関わるためのきっかけになっていたら嬉しい。そして、陸前高田の現状を知って少し安心したり、少しでも陸前高田に興味を持ったり、行ってみたいと思った人がいれば、本研究制作に意義があったと言えるだろう。

— ぜひ、私が陸前高田で過ごした物語にお入り込みください

05 作品概要 [Enter the manuscript paper]